

# 接触場面における会話不理解の 非調整プロセス

—日本語母語話者の問題認識に関する一考察—

今 千春\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 先行研究
  3. 調査
    - 3.1 調査対象者
    - 3.2 調査方法
  4. 分析の枠組み
  5. 日本語母語話者による非調整の概要
  6. 日本語母語話者による非調整の要因
    - 6.1 初級学習者に対する非調整の傾向
    - 6.2 中級学習者に対する非調整の傾向
    - 6.3 上級学習者に対する非調整の傾向
  7. おわりに
- 

## 1. はじめに

日本語母語話者との接触場面（ネウストプニー1995）において、日本語学習者が相手の話を正しく聞き取り、理解することは難しい。会話において理解上の問題が生じた場合、日本語学習者は理解できなかった部分を相手に聞き返したり、自分で推測したりして解決を図ろうとするだろう。一方、日本語母語話者側も、あらかじめ日本語学習者が理解しやすいことばに言い換えたり、助けを求められた場合にはそれに答えるなど、様々な調整を行って

---

\* 金剛大学校 専任講師 日本語教育学

いると考えられる。

日本語母語話者が行う調整は「フォリナー・トーク」(Ferguson1971、スクータリデス1981)として注目され、これまで多くの研究がなされてきた。しかし、日本語母語話者の調整が常に日本語学習者に実施されるとは限らない。日本語学習者が日本語母語話者に聞き返して助けを求めているにもかかわらず、日本語母語話者が調整を行わないこともあるだろう。それにもかかわらず、このような日本語学習者に必要とされる調整が実施されているかという観点から日本語母語話者の調整研究は、従来あまり行われていないようである。

そこで本研究では、日本語学習者から調整要求があったにもかかわらず日本語母語話者によって調整が行われなかった場合について、特に日本語母語話者が日本語学習者からの調整要求を認識せず、調整を行わなかった場合に注目する。そして調整が行われない要因を考察し、それが日本語学習者の日本語能力によってどのような特徴を持っているのかを明らかにする。

## 2. 先行研究

日本語学習者が聞き手となっている場合の理解面の問題に関する研究の中で、日本語学習者側に焦点をあてたものとしては田中他(1986)、Ozaki(1985)、尾崎(1992)が挙げられる。田中他(1986)では、日本語学習者の聴解モデル、さらに問題が生じた際に用いる聴解ストラテジーを提示している。またOzaki(1985)、尾崎(1992)では「聞き返し」のストラテジーについて、「相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策」と定義し、その表現形式や伝達意図の分析を行っている。また、日本語学習者が「聞き返し」を避ける「聞き返し」回避ストラテジー(尾崎1992)も確認されており、尾崎・椿(2001)は、分からないことをそのまま聞き流す「消極的な回避」、また理解できた事柄をもう一度確認することによって理解できなかった部分が無視してもいい情報であることを間接的に確かめる「積極的回避」とに分類している。

一方、日本語母語話者が日本語学習者の理解を促進するために用いるストラテジーは「フォリナー・トーク」研究に代表される。フォリナー・トークは、Ferguson(1971)において初めて提唱された概念で、その言語の十分な能力を持たない、またはその言語の知識が全くない外の話者に対して使用される簡略化された言語現象(Simplified register)であると定義されている。フォリナー・トーク研究は、主に言語的な調整に関する研究と談話面における調整の研究とに大別され、近年ではこれら両方の観点からの研究も行われている(Ellis1985、Larsen-Freeman and Long1991など)。

日本語のフォリナー・トークの最初の研究はスクーターデス (1981) によって行われ、日本語にもフォリナー・トークが存在すること、日本語のフォリナー・トークは他の言語と共通した特徴を持つと同時に日本語独自の特徴も持ち合わせていることが報告された。そしてこれ以後、日本でもフォリナー・トーク研究が盛んに行われるようになった (御館1998、大平1999など)。

また、日本語母語話者と日本語学習者との双方によってなされるという観点では、意味交渉研究 (negotiation of meaning) (Gass and Varonis1985) が挙げられる。さらにMiyazaki (1997) はこの意味交渉研究を発展させ、会話集に生じた不適切な問題を処理するためのモデルを提示している。この調整モデルでは、相手の調整を引き出す役割を果たす引き金 (trigger) を調整マーカースとし、誰が調整マーカースを表し、誰が調整を行うかに着目してその調整パターンや調整デザインについての考察がなされている。

しかし、以上のような研究では主に調整ストラテジーに焦点が置かれており、日本語母語話者の調整の実施という観点から扱っている研究は少ない。従来の研究の中で日本語母語話者から適切な調整が引き起こされない要因について扱っているものもあるが (尾崎1993、和泉元1997、町田1997など)、そこで要因として挙げられているのは主に日本語学習者の聞き返しの表現形式の種類であり、日本語母語話者がなぜ必要とされる調整を行わないのかという観点から考察を行った研究はほとんど見られない。日本語学習者の会話不理解問題を解明するためには、日本語学習者の聞き返しだけでなく、日本語母語話者が調整を行わないという段階に至るまでの過程を詳しく観察し、その要因を探る必要があるだろう。

## 3. 調査

### 3.1 調査対象者

調査対象者は日本語学習者21名、日本語母語話者7名 (NS1-NS7) の合計28名である。日本語母語話者は全て大学もしくは大学院に在学中の学生、日本語学習者は大学の短期留学生、研究留学生、大学院生、および主婦で、所属している日本語クラスによりそれぞれ初級7名 (FB1-FB7)、中級7名 (FI1-FI7)、上級7名 (FA1-FA7) に大別した。国籍は中国、中国ウイグル自治区、韓国、インドネシア、フィリピン、ハンガリー、オーストラリア、アメリカ、カナダ、セネガル、ブラジルであり、特に制限は行わなかった。

### 3.2 調査方法

本研究では、日本語母語話者と日本語学習者との対面による会話を録音・録画し、分析資料とした。本調査のために準備された部屋で日本語母語話者と日本語学習者に1対1で約15分間自由に会話してもらい、その様子を録音・録画した。調査の際、飲食、辞書の使用、メモをとることなどの制限は特に行わなかった。

さらに、会話参加者の内省的意識を収集するため、会話録画日から1週間以内に、日本語母語話者、日本語学習者両者に対しフォローアップ・インタビュー（ネウストプニー 1994、2002、ファン2002）を行い、これらも全て分析資料とした。

## 4. 分析の枠組み

本研究ではまず日本語学習者の会話不理解上の問題を特定した。会話データ中、日本語学習者が発した聞き返し、非言語行動などを参考にし、会話不理解上の問題を抽出した。さらに、日本語学習者がわかるふりなどの調整を行い、聞き返しなどで確認できなかった会話不理解上の問題を、フォローアップ・インタビュー（以下、FUIとする。）での報告から特定し、これらの全てを日本語学習者の不理解上の問題とした。

次に、尾崎（1992）、Miyazaki（1997）をもとに日本語学習者が実施した調整ストラテジーを分類した。さらに分類された調整ストラテジーのうち、「聞き返し」を含む調整要求マーカ（adjustment request markers）、及び不適切マーカ（flag）（Miyazaki 1997）を日本語母語話者に調整を要求するタイプのストラテジーとして適用し、抽出した。

そして日本語学習者からの調整要求に対し日本語母語話者がその要求に気づかず、調整を実施しなかった事例を取り出し、今（2002）などを参考にその要因を分類した。さらに、その要因が日本語学習者の日本語能力によってどのような特徴を持っているのかについて考察を行った。

## 5. 日本語母語話者による非調整の概要

本調査において日本語学習者が認識した会話不理解上の問題は495件であった。そのうち日本語母語話者に調整要求を行った事例は236件確認された。日本語学習者の問題が日本語母語話者によって調整されなかった事例は69件、さらに日本語学習者からの調

調整要求が日本語母語話者に認知されず非調整につながった事例は44件であった。以下からはこの44件に焦点を当て、考察を行う。

## 6. 日本語母語話者による非調整の要因

前述の通り、日本語母語話者が日本語学習者から調整要求があった会話不理解上の問題に関してそれに気づかず調整が実施されない事例は44件確認された。日本語学習者の日本語能力別に見ると、初級学習者の場合は24件、中級学習者は11件、上級学習者は9件となっていた。

本調査ではこれらの要因について、会話データ及び日本語母語話者のFUIでの報告をもとに考察を行った。その結果、非調整の要因は、日本語母語話者が日本語学習者の調整要求を取り違えた場合、日本語学習者から日本語母語話者の注意が逸れていた場合、会話進行上の要因の3つのタイプに大別することができた。

さらに、これらの要因を詳しく考察した結果、日本語母語話者が日本語学習者の調整要求を取り違えた場合は3種類、日本語学習者から注意が逸れていた場合は4種類、会話進行上の要因は2種類にそれぞれ分類することができた。

以下の表は、日本語母語話者の非調整の要因を表したものである。

表1：日本語母語話者による非調整の要因

非調整の要因	
日本語学習者の調整要求を取り違えた場合	母語話者の期待に合った応答であった
	学習者の理解を確信していた
	学習者の日本語能力を意識していない
日本語学習者から注意が逸れていた場合	他の調整を実施していた
	発話中に発話内容を考えていた
	他の活動に集中していた
	会話不理解以外の問題を留意していた
会話進行上の要因	話題の最後の部分であった
	学習者が発話権を保持していた

まず、日本語母語話者が日本語学習者の調整要求を取り違えた場合は3種類確認された。

1つは、調整要求が日本語母語話者の期待に合った応答であった場合である。これは、日本語学習者が調整要求として示した表現形式が日本語母語話者によって調整要求とは異なる解釈がなされたため、日本語学習者の会話不理解が認識されない場合で、従来の研究で指摘されてきた要因である（尾崎1993、和泉元1997、町田1997）。

2つ目は、日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた場合である。本調査では、日本語母語話者は会話を通じて日本語学習者の日本語能力がどれくらいであるかを評価し、それをもとに調整を実施する傾向にあった。このような日本語学習者の日本語能力の評価から、ある単語や表現について、「このことばは必ず知っているはずだ」、「これくらいはわかるだろう」と予断した場合、会話不理解が認識されない事例が観察された。

3つ目は、日本語母語話者が日本語学習者の日本語能力を意識していない場合である。日本語母語話者が日本語学習者の能力を評価することよりも、会話の進行や内容に目を向けていた場合、日本語母語話者は日本語学習者の日本語能力には意識が及びにくくなっていた。特に会話の開始部分において、日本語母語話者が自己紹介において日本語学習者の属性や背景に興味を持ち、その内容に注目した結果、日本語学習者の日本語能力にまで意識が及ばない事例も見られた。

このように、日本語学習者の日本語能力が意識されないことが要因となり、日本語母語話者は日本語学習者からの調整要求を認識しない場合もある。なお、前述の日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた場合とは、前者が日本語学習者の日本語能力を評価した上で理解可能であると予断するのに対し、日本語能力を意識しない場合には、日本語能力に関して全く意識せず、評価も行っていないという点で異なる。

次に、日本語学習者から注意が逸れていた場合であるが、これは本調査ではさらに4種類に分類することができた。

まず1つは、日本語母語話者が他の調整を実施していた場合である。日本語母語話者があらかじめ難しいと思う表現を言い換えたり、ゆっくり話すなどの調整を行っていたため、日本語学習者への注意力が弱まり、会話不理解が認識されない場合が見られた。

2つ目は、日本語母語話者が発話中に発話内容を考えていた場合である。このような場合にも日本語学習者への注意力が弱まり、会話不理解が留意されなかった。

続いて3つ目は、日本語母語話者が他の活動に集中していた場合である。本研究では、会話中の飲食、辞書の使用、メモを取るなどについて特に制限を行わなかった。そのため、会話中、日本語母語話者、日本語学習者両者に発話以外の行動も観察された。そして、日本語母語話者に関して、このような発話以外の行動が行われ、さらにその活動に日本語母語話者が集中していた場合、日本語学習者の会話不理解に対して認識されない場合も見られた。

4つ目は、日本語母語話者が会話不理解以外の問題を留意していた場合である。本

研究で観察された会話不理解以外の問題は言語的な問題ではなく、話し方、会話参加の仕方、会話の内容など社会言語学的な問題が挙げられていた。

最後に、会話進行上の要因はそれぞれ2種類に細分された。

まず1つは、会話不理解問題がその話題の最後の部分であった場合である。会話において、お互いにあることについて十分話し終えた際には参加者の緊張感が緩和され、次の話題に移行するまでに笑いやあいまいな表現が増える傾向にある (Hayashi1996) ため、話題の最後の部分で起きた会話不理解問題も認識されにくいと考えられる。本研究においても、話題の最後の部分で「そうですよねー」、「(食べ物) おいしいですよー」などの表現が用いられており、そこで生じた不理解問題は認識されない傾向にあった。

もう1つの要因は、日本語学習者が発話権を保持していた場合である。このような場合にも日本語母語話者の発話が日本語学習者に理解されているかどうかという方向へは目が向けられず、日本語学習者の会話不理解が留意されない場合がある。

以上のような日本語母語話者の非調整の要因を日本語学習者の日本語能力別に考察したところ、以下の表のような傾向が現れた。

表2：日本語母語話者による非調整の日本語学習者の日本語能力別傾向

非調整の要因	初級	中級	上級	全体
日本語学習者の調整要求を取り違えた場合	4 (16.7%)	4 (36.4%)	2 (22.2%)	10 (22.7%)
（母語話者の期待に合った 応答であった）	3 (12.5%)	2 (18.2%)	1 (11.1%)	6 (13.6%)
（学習者の理解を確信して いた）	0 (0.0%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	2 (4.5%)
（学習者の日本語能力を意 識していない）	1 (4.2%)	0 (0.0%)	1 (11.1%)	2 (4.5%)
日本語学習者から注意が逸 れていた場合	18 (75.0%)	5 (45.5%)	3 (3.3%)	26 (59.1%)
（他の調整を実施してい た）	10 (41.7%)	0 (0.0%)	3 (3.3%)	13 (29.5%)
（発話中に発話内容を考え ていた）	5 (20.8%)	3 (27.3%)	0 (0.0%)	8 (18.2%)
（他の活動に集中してい た）	3 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (6.8%)
（会話不理解以外の問題を 留意していた）	0 (0.0%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	2 (4.5%)
会話進行上の要因	2 (8.3%)	2 (18.2%)	4 (44.4%)	8 (18.2%)
（話題の最後の部分であ った）	1 (4.2%)	1 (9.1%)	1 (11.1%)	3 (6.8%)





ずっと食べてましたよー。噛むの大変でした」と話している。このようにNS6は、ここで硬いドーナツを食べるということに意識が集中していたため、FB6が「ドーナツ」を理解できず調整要求を表出したにもかかわらず、この問題を認識しなかったのであろう。

このように、日本語学習者からの注意が逸れていた事例が初級学習者にのみ表れたのは、日本語母語話者が常に会話をコントロールする役割を担っていたことが背景になっていたと考えられる。中上級学習者との会話では、日本語学習者も自ら発話して会話を進めていくと推測されるが、初級学習者の場合には、日本語母語話者が常に会話に集中してコントロールしなければ会話を継続することが困難となっていたと考えられる。そのため、日本語母語話者が他の活動を行い、会話のメッセージ伝達から意識が逸れていた場合、日本語学習者からの調整要求が認識されにくい傾向にあったと考えられる。

## 6.2 中級学習者に対する非調整の傾向

中級学習者では、日本語学習者から注意が逸れていた場合（5件、45.5%）、日本語学習者の調整要求を取り違えた場合（4件、36.4%）が高い割合を占めている。中でも、日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた場合、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していた場合（それぞれ2件、18.2%）は中級学習者との会話においてのみ確認された事例であった。このことから、中級学習者の場合には初級学習者とは異なり、会話進行において実質的な問題が生じることが少なくなるため、中級学習者に対する認識が誤って行われたり、会話不理解以外の問題も顕在化したりする可能性があると考えられる。

日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた場合、それは日本語母語話者が日本語学習者の言語能力の認識を誤って行ったことが起因していると考えられる。本調査では日本語母語話者が、日本語学習者が「留学生」であることを意識し、「これくらいの表現ならわかるだろう」と予断していたのに対し、逆に不理解となった事例が確認された。しかし、ここで日本語母語話者は日本語学習者の理解を確信していたため、日本語学習者からの調整要求を調整要求とは解釈せず、あいづちと取り違えていた。

例3：NS2がFI2の理解を確認していた場合（NS2×FI2）

NS2：そう、しゃべれないんでー、えーなんか、音が

FI2：

NS2：違うんですよ、発音がもう

FI2： {静止・NS2を見つめる}発音が、うーん

NS2：できないですねー

FI2：

上例は、NS2がFI2にNS2の出身地である沖縄方言について、沖縄の方言は話すことができないということ話をしている。ここでFI2は「音が違う」、「発音」が何を意味しているのかを理解できずに不理解を表示しているが、NS2は調整を実施していない。FUIにおいてNS2は、「言語学的なことばはわかると思った」と話していることから、「音」や「発音」という語彙についてFI2は理解可能であると予断していたと考えられる。このようにNS2はFI2の認識を誤ったために、理解可能である語彙を誤って予断し、実際に不理解問題が生じた際には認識しなかったと推察される。

さらに中級学習者の会話では、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していた場合も特徴となっている。前述の通り、中級学習者の会話では、会話進行において実質的な問題が少なくなるため、初級学習者との会話で問題として常に表れていたメッセージの伝達にはあまり注意が払われなくなる。逆に、メッセージ伝達以外の問題が表面化し、それを日本語母語話者は強く意識するようになると考えられる。

以下の例は、NS7がFI7の会話協調の原則（Grice1975）への違反について留意し、否定的に評価していたために、会話不理解に関するFI7の問題に気づかなかった事例である。

例4：NS7がFI7の「会話の協調」に関する問題を留意していた場合（NS7×FI7）

NS7：え、ちなみに、

FI7： {体を静止・眉をひそめる・視線をNS7へ}

NS7：何学部なんですか↑ あ

FI7： 文学ー その、ぶ、私も文学部

NS7のFUIによると、NS7はFI7との会話においてFI7が「しゃべりすぎること」、「自分の出身や所属を明らかにしないこと」に対して留意し、否定的に評価していた。このうち「しゃべりすぎること」は、FI7が会話強調の原則（Grice1975）の「質の原則」に違反していたと考えられる。

そして、このような違反を留意していたNS7は、上の例の部分で「FI7が自分の所属を全く話そうとしないため、耐えられずに学部を質問」している。しかし、このNS7の質問発話の中でFI7は「ちなみに」が理解できず、調整要求を示している。それに対しNS7はFI7の不理解以外の問題を留意していたため、FI7の不理解については留意せず、調整も行っていない。

このように日本語母語話者が日本語学習者の会話不理解以外に留意していた問題には、上記のような「会話の協調」以外に「日本語学習者の外見」も観察された。日本語母語話者が接触場面においてこの種の社会言語的な問題を留意することはフェアブラザー（2002）においても指摘されている。また、日本語母語話者は正確な言語形式より

も、円滑なコミュニケーションを重視する (Hadden 1991、原田1998) ため、実質的な問題が生じない限り、日本語母語話者は言語的な問題よりも社会言語的な問題を留意したとも考えられる。

### 6.3 上級学習者に対する非調整の傾向

上級学習者の場合には、日本語学習者から注意が逸れていた場合のうち、事前調整された発話であった場合、また会話進行上の要因のうち日本語学習者が発話権を保持していた場合が全9件中それぞれ3件となっている。

高い日本語能力を持つ上級学習者の会話は、初・中級学習者に比べ会話内容も複雑になり、上級学習者が発話する割合も増え、日本語母語話者が聞き手となる機会も増えると予想される。そして日本語学習者が話し手となった場合には、日本語母語話者は聞き手として会話に参加していたため、自分の発話に対する日本語学習者の会話不理解にはあまり目が向けられていなかった可能性がある。本データNS1の場合には、初級であるFB1との会話ではNS1が常に質問、FB1が応答の形で、FB1が長い発話権を持つことはなかったのに対し、上級のFA1との会話ではFA1も7箇所発話権を持ち、長く発話を続けている様子が見られた。

以下の例は、FA2がNS2に自国であるハンガリーで選挙があったことについて話している部分である。

例5：FA2が発話権を保持していた場合 (NS2×FA2)

NS2： ええ

FA2：あと一、き、昨日一 ハー、ハンガリーに、

NS2： ああ

FA2：そ、総理、大臣を選ぶことになりました

NS2：え、選挙一 です

FA2： う↑ う、はい (笑)

NS2：×××××

FA2： い、今は、すごく、うーんと楽しみ待ってます

ここでFA2はNS2の「選挙」という単語を初めて聞いたことばで理解できなかったという。そこで「う↑」と聞き返しを行っているが、NS2は「普通に聞いていた」と話しており、FA2の不理解には気づいていない。このように日本語学習者が発話権を保持している場合、日本語母語話者の役割はその日本語学習者の発話権を支持することであるため

(Hayashi1996)、日本語母語話者の発話が日本語学習者に理解されているかどうかという方向へは目が向けられず、日本語学習者の問題が理解されにくい傾向にあると考えられる。

また、上級学習者の場合には、日本語母語話者が発話内容について考えていた、他の活動に集中していた、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していたことが非調整の要因となった事例は1例も確認されていない。これは、上級学習者との会話は初級学習者との会話のように日本語母語話者が常にホストとなって調整を行う必要性が低かったこと、また中級学習者で見られたような会話不理解以外の社会言語的な問題も少なくなっていたことが要因として表れていたのではないかと推察される。

## 7. おわりに

本研究では、日本語母語話者が日本語学習者による会話不理解に関する問題の調整要求をなぜ認識せず、調整しないのか、非調整の要因について考察を行った。その結果、非調整の要因は日本語学習者の調整要求を取り違えた場合、日本語学習者から注意が逸れていた場合、会話進行上の要因の3タイプに大別され、日本語学習者から注意が逸れていた場合が最も大きな要因となっていた。

また、これらを日本語学習者の日本語能力別に詳しく検討した結果、初級学習者の場合には日本語学習者から注意が逸れていた場合が要因として高い割合を占めていた。これは、初級学習者の日本語能力を考慮し、日本語母語話者が常に会話をコントロールして維持していかなければならなかったことから、日本語母語話者が自分自身の発話や行動に集中し、日本語学習者からは注意が逸れやすい傾向があると推察された。

一方、中級学習者の場合は、日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していたことによる非調整が特徴となっていた。中級学習者の場合には初級学習者よりも会話中の言語レベルの問題が少なくなるため、日本語母語話者によって言語能力の認識が誤って行われたり、会話不理解以外の問題も顕在化したりする可能性があることが示唆された。

さらに上級学習者の場合には、日本語母語話者が発話内容について考えていた、他の活動に集中していた、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していたことなどは非調整の要因とはなっておらず、主に日本語学習者が発話権を保持していた場合に非調整となっていた。これは上級学習者が高い言語能力、社会言語能力を携えており、会話に積極的に参加していたことが関係していると考えられる。

このように日本語学習者の会話不理解の問題に対して日本語母語話者が調整を行わな

い要因については、日本語学習者の聞き返しの表現だけではなく、日本語母語話者側にも多くの要因があることが明らかになった。しかし、ここで指摘されたのは、あくまで日本語母語話者が日本語学習者からの調整要求を認識できない要因であり、日本語母語話者の非調整について全てが明らかになったわけではない。今後は、日本語学習者の調整要求を認識したにもかかわらず調整が行われない事例についても考察を加え、その要因を明らかにしていく必要があるだろう。

そして日本語母語話者が日本語学習者の困難な部分がある程度把握し、適切に調整する能力は、日本語の教室場面においても応用できるだろう。ビジターセッションなどの実際使用の活動において、これまでは日本語学習者がビジターの発話の理解に困難をおぼえる場合が見られたが（村岡1992）、ビジターである日本語母語話者が日本語学習者に対して適切に調整し、日本語学習者の理解を促進することによって、日本語学習者の動機を高めることもできるだろう。

さらに、日本語母語話者が日本語学習者の問題を予測できれば、接触場面に対する心理的な抵抗も少なくなり、日本語母語話者が日本語学習者とより多くの接触場面を持つことも考えられる。そしてこれは同時に日本語学習者の実際使用場面となるため、日本語学習者のコミュニケーション能力の習得にも貢献しうるだろう。このように、日本語母語話者、日本語学習者双方が相互に歩み寄り、理解使用という姿勢が多文化共生時代には必要となってくるのではないだろうか。

## 【参考文献】

- フェアブラザー、L.C. (2002) 「日本語母語話者の規範の顕在化—非母語話者の逸脱が留意される条件—」 『第9回社会言語科学会研究大会予稿集』 社会言語科学会 9-14頁
- ファン、S.K. (2002) 「対象者の内省を調査する (1) フォローアップ・インタビュー」 J.V.ネウストプニー、宮崎里司共編 『言語研究の方法』 くろしお出版 87-96頁
- Ferguson, C.A. (1971) Absence of copula and notion of simplicity: A study of normal speech baby talk, foreigner talk, and pidgins. In Hymes, D.(ed.) *The pidginization and creolization of language*. Pp.141-150. London: Cambridge University press.
- Gass and Varonis (1985) Task variation and non-native /non-native negotiation of meaning. In S. Gass and C. Madden (eds.) *Input in Second Language Acquisition*. Pp.149-161. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Grice, H.P. (1975) *Logic and Conversation*. In P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Academic Press.
- Hadden, B.L. (1991) Teacher and Nonteacher Perceptions of Second-Language Communication, *Language Learning*, 41-1. Pp.1-24.
- Hayashi, R. (1996) *Cognition, Empathy, and Interaction: Floor Management of English and Japanese conversation*. Ablex.
- 和泉元千春 (1997) 『接触場面における発話調整の分析—中級学習者との会話を資料として』 修士学位論文 大阪外国語大学社会研究科
- 今千春 (2002) 「日本語母語話者の留意プロセス—日本語非母語話者の受容面に対する管理の一考察—」 村岡英裕編 『接触場面の言語管理研究 vol.2』 千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 13-27頁
- 町田延代 (1997) 「電話におけるフォリナー・トーク・ディスコースの違い—日本語非母語話者の言語能力と交渉—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 1号 83-99頁
- Miyazaki, S. (1997) Communicative Adjustment between Native Speakers and Non-native Speakers of Japanese in Contact Situations. Ph.D thesis. Department of Japanese Studies. Monash University.
- 村岡英裕 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について: ビジター・セッション場面の分析」 『世界の日本語教育』 第2号 国際交流基金日本語国際センター 115-128頁
- ネウストプニー、J.V. (1994) 「日本研究の方法論: データ収集の段階」 『待兼山論叢』 28号 日本語学篇 1-24頁
- ネウストプニー、J.V. (1995) 「日本語教育と言語管理」 『阪大日本語研究』 7 67-82頁

Ozaki, A. (1989) *Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese*. The Australian National University

尾崎明人 (1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 251-263頁

尾崎明人・椿由紀子 (2001) 「電話会話における初級日本語学習者の「聞き返し」と「聞き返し」回避」『日本語・日本文化論集』9号 名古屋大学留学生センター 83-94頁

瀬藤英美子 (1995) 『日本人のフォリナートークとその意識に関する一考察』修士学位論文 大阪大学文学部

スクータリデス、A. (1981) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号 53-61頁 日本語教育学会

#### < 会話資料凡例 >

↑ 上昇イントネーション

、 短いポーズ

ー 長音

(笑) 笑い

{ } 非言語行動

× 不明箇所

(下線)  日本語学習者が認識した会話不理解問題

(波線)  日本語学習者による調整要求ストラテジー

(囲み点線) 日本語母語話者による非調整

## 要 旨

本研究では、日本語母語話者と日本語非母語話者との接触場面において日本語非母語話者が抱える会話理解上の問題を取り上げ、日本語母語話者の非調整の要因について考察を行った。特に日本語母語話者が日本語学習者からの調整要求を認識せず、調整を行わなかった場合に注目し、問題の認識・調整が行われない要因を日本語学習者の日本語能力別に考察した。

その結果、非調整の要因は日本語学習者の調整要求を取り違えた場合、日本語学習者から注意が逸れていた場合、会話進行上の要因の3タイプに大別された。

初級学習者の場合には日本語学習者から注意が逸れていた場合が要因として高い割合を占めていた。これは、初級学習者の日本語能力を考慮し、日本語母語話者が常に会話をコントロールして維持していかなければならなかったことから、日本語母語話者が自分自身の発話や行動に集中した結果であると推察された。

一方、中級学習者の場合は、日本語母語話者が日本語学習者の理解を確信していた、日本語学習者の会話不理解以外の問題を留意していたことによる非調整が特徴となっていた。中級学習者の場合には初級学習者よりも会話中の言語レベルの問題がが少なくなるため、日本語母語話者によって言語能力の認識が誤って行われたり、会話不理解以外の問題も顕在化したりする可能性があることが示唆された。

さらに上級学習者の場合には、主に日本語学習者が発話権を保持していた場合に非調整となっていた。これは上級学習者が高い言語能力、社会言語能力を携えており、会話に積極的に参加していたことが関係していると考えられる。

このように日本語学習者の会話不理解の問題に対して日本語母語話者が調整を行わない要因については、日本語学習者の聞き返しの表現だけではなく、日本語母語話者側にも多くの要因があることが明らかになった。しかし、ここで指摘されたのは、あくまで日本語母語話者が日本語学習者からの調整要求を認識できない要因であり、今後は、日本語学習者の調整要求を認識したにもかかわらず調整が行われない事例についても考察を加え、その要因を明らかにしていく必要がある。

以上のように更なる考察が必要とされるものの、本研究によって接触場面における会話不理解問題に対する日本語母語話者の調整行動の新たな側面が明らかになった。これからの日本語教育では、日本語学習者のみが日本語を学ぶのではなく、日本語母語話者が日本語学習者に歩み寄り、理解し、サポートしようという姿勢が必要となるだろう。それが多文化共生への第一歩ではないかと考える。

キーワード：接触場面、日本語母語話者、会話不理解、  
フォーリナー・トーク、聞き返しのストラテジー、非調整

투 고 : 2007.11.30  
1차 심사 : 2007.12.08  
2차 심사 : 2007.12.29

住 所 : (320-931) 忠南 論山市 上月面 大明里 14-9  
電 話 : 041) 731-3457 011-9612-6256  
e-mail : kiai\_de\_ikeru@hotmail.com